

2025年9月20日発行
日本比較文化学会関東支部

2025年度第1号のレター発行となります。本号では、2025年9月13日(土)に仙台市戦災復興記念館にて6年ぶりに開催されました「2025 年度日本比較文化学会東北／関東支部合同研究大会」での支部会員の発表要旨、並びに研究大会終了後の懇親会について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

◆東北／関東支部合同研究大会◆ (第65回 関東支部例会)ご報告

当日は9名の両支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。

◆開会の挨拶: 関東支部 支部長 郭 潔蓉 (東京未来大学)

◆研究発表:

会場 1(4階 研修室)

茶道における「わび」概念の現代的展開 —語彙史的検証による文化政策調査の学術的検討—

中園 大樹 (慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科後期博士課程)

本研究は、茶道文化における「わび」概念の現代的展開を、独自の語彙史的検証と文化庁調査データの学術的検討を通じて検証する。

従来の研究では『万葉集』から『徒然草』を経て茶道への「わび」概念の連続的発展が想定されてきた。しかし、本研究では『日本国語大辞典』を基準とした語彙史的検証により、古典文学の「わび」が「わびしく思うこと・気落ちすること」「閑居を楽しむこと」「謝罪すること」という感情・状態表現であるのに対し、茶道の「わび」は「閑寂な風趣・簡素の中にある落ち着いたさびしい感じ」という美的理念であり、両者が本質的に異なる概念であることを述べる。

特に重要なのは、文化庁「令和2年度生活文化調査研究事業(茶道)」における「わびさび等の美意識」という設問設計の課題である。茶道未経験者の45.2%、経験者の40.2%という数値を本研究の語彙史的検証の結果と照合すると、この数値は茶道固有の「わび」概念への理解よりも、一般的な日本文化の美意識への関心を示していると考えられる。

さらに、総務省統計局「社会生活基本調査」によると、茶道を趣味とする人の行動者数は平成8年(1996年)の263万人から平成28年(2016年)の176万人へと20年間で約33%減少している。この

量的変化と茶道固有の「わび」概念の継承における質的課題を指摘し、学術的調査の必要性を提示した。

本研究により、「わび」概念が茶道文化において感情表現から美的理念への質的転換を遂げた独創的概念であることを語彙史的に示し、従来の系譜的理解への新たな視点を提示する。今後は多角的な学術研究による概念継承の実態解明が求められる。

現代日本語における四字漢語の構造について —漢語動名詞用法を中心として—

陳 志文 (国立高雄大学 (台湾))

発表者は近年、「二字漢語」を中心に日本語における語彙構造の研究を進めてきた。本発表では、それらの研究の延長線上として、「<二字漢語>+<二字漢語>」によって構成される臨時的な四字漢語のうち、名詞的用法に焦点を当て、その使用実態を明らかにすることを目的とする。

以下に示す例文 (1) ~ (4) は、いずれも現代日本語の多様な文脈において出現した臨時的四字漢語である。

(1) 現在フランスに留学しているのですが、日本にいるときは肌の調子が良いのに、フランスに帰るとニキビが大量発生します。自炊で、栄養にも気を配っているので食生活が原因とは考えられません。やっぱり乾燥が原因なんではないでしょうか? (OC09_07783、590)

(2) 企業の成員である各個人は人間である以上、「自らの社会生活が安定充実し、たえず向上していくことを求めるのは当然である。」(PB13_00803、18770/LBt4_00002、12100)

(3) 第一に、TCE のみの曝露に関するよい情報に欠けている。労働者は概して多数の溶剤に複合被曝しているからだ。(PB34_00192、45080)

(4) 広島県比婆郡口和町下芦原の「まんさく茶屋」でワニ肉を食べたことがあった。衰退するワニ料理の伝承保存、さらに、ワニ肉の多彩な利用をめざして、前杵笑子さんほか五人で昭和六十一年四月二十六日に開かれた店である。(LBt3_00178、18670)

これらの表現には、一見簡素な「四字」の構成にもかかわらず、複雑な構造と多様な品詞機能が見られる。たとえば、(1) の「大量発生する」は、「大量に発生する」という意味の自動詞的な漢語動名詞用法であり、(2) と (3) においても同様の漢語動名詞の用法が確認される。(4) は名詞としての用法と判断される。

このような「臨時的四字漢語」に関する先行研究は非常に限られており、特に漢語動名詞としての体系的分析は十分に行われていない。そこで本発表では、漢語動名詞的用法をもつ四字漢語表現に的を絞って、その構造と用法について比較分析を行う。これにより、日本語語彙研究の一助となるとともに、日本語教育への応用可能性についても展望を示したい。

海外ルーツ中高年層の地域社会への参加 —東京近郊ベッドタウン市川市の支援ニーズ分析—

董 航（環太平洋大学）

本研究は、東京近郊ベッドタウンである市川市に居住する海外ルーツ中高年層を対象に、地域社会参加の実態と支援ニーズを明らかにするものである。市川市では、外国人住民の多くが労働年齢層であり、今後の高齢化が見込まれる。しかし、現行の支援策は「高齢者」と「外国人」が分断されており、両者の交差点である海外ルーツ中高年層への対応が手薄となっている。

研究では、市川市在住の海外ルーツ中高年層4名に対し、半構造化インタビューを実施した。調査項目は、(1)地域活動への参加状況、(2)公的支援の利用経験、(3)将来の生活設計の3領域に焦点を当てた。

分析の結果、以下の3つの主要な知見が得られた。第一に、日本語能力が中級レベルであっても、文化的な違いから地域活動への参加に躊躇するケースがみられた。第二に、公的支援については情報アクセスの難しさや制度の複雑さが利用障壁となっていた。第三に、多くの対象者が将来的な帰国を検討しつつも、日本での生活基盤との間で葛藤を抱えていることがわかった。

これらの結果から、ベッドタウン特有の課題として、(1)労働期から高齢期を見据えた継続的な支援、(2)文化や習慣の違いを考慮した参加促進策、(3)既存の民族ネットワークを活用した情報提供の重要性が示唆された。

和歌山県アメリカ村の文化継承の取り組み

田中 真奈美（東京未来大学）

和歌山県美浜町三尾地区に拠点を置くNPO法人「日ノ岬・アメリカ村」は、地域再生とふるさと教育を目的に2018年に設立された。三尾地区は、かつてカナダ・スティーブストンの鮭漁業に従事する移民を数多く輩出した地域である。

本発表では、当該NPOが展開する活動のうち、青少年層に対する郷土への誇りと愛着の醸成を目的とした「語り部ジュニア」事業に焦点を当て、その意義と成果について考察する。

「語り部ジュニア」は、生徒が英語を用いて地域の歴史や観光資源を紹介することを目的とする教育的実践である。事業は2018年に始動し、各期は2年間を単位とし、期末にはカナダ・バンクーバーを訪問する国際交流プログラムを含んでいる。しかし、参加者の確保は継続的な課題となっている。第1期には約15名の参加者があったが、第4期では3名に減少している。これは、町内に中学校および高等学校が存在しないこと、当該年代の生徒は課外活動によって週末の時間確保が困難であること、さらには対象年齢層の人口が減少していることに起因している。今後は、地域の歴史を学ぶ意義や事業の価値をより広く発信することが求められる。

「語り部ジュニア」の6年間にわたる取り組みにより、三尾出身者の子孫との交流が徐々に形成されつつあり、三尾地区の地域活性化に一定の効果をもたらしている。現在進行中の第4期では、新たなプロジェクトとして、カナダ在住の日系五世とのネットワーク構築が計画されている。これらの取り組みは、地域アイデンティティの継承および地域振興の実現に資するものであると考えられる。

儒教文化と世間 -日本・中国・韓国の文化の比較から見えるもの-

遠山 一明（横浜市立大学大学院都市社会文化研究科博士後期課程）

本研究は、日本、中国、韓国の東アジア三か国における各国の「対人関係」を比較の前提とし、一般的にいう儒教文化圏における当該三か国の精神文化の特徴と「対人関係」の在り方を概観し、各国の人々の行動様式への影響を検討するものである。特に、日本の「対人関係」における共有概念である「世間」が中国と韓国に存在し得るかを分析をし、三か国に共通する儒教文化の受容と「世間」との相関性を解明する。

先行研究の分析の結果、「世間」の概念は、個人から広がる「関係主義」を人間関係の基本としている中国には存在し得ず、家族主義を起因とした因襲的集団が形成されている韓国社会では、特定範囲の人間関係において存在していることが判明した。

日本人は、目に見えない空気に支配され世間体を気にして生きる傾向があるが、為政者による間接的に支配をされてきた歴史があり、儒教的思想の強い影響を受けている。その中で「世間」という概念は、中国の大義名分論と同じく、集団を統治するためのシステムとしての価値基準や規範の機能を果たして来た。儒教と「世間」の原理は共通項が存在し、共同体維持していく手法として双方が相乗をしていた。

当該三か国の中で、最も共同体の維持と平和が求められるのは狭小の島国である日本であり、この国の共同体を維持していく規範（掟）として「世間」という共有概念が生まれ、今日の日本社会の秩序を規定し存在し続けていると定義をした。



会場の様子 2025年9月13日斎藤隆枝先生撮影

日本語とインドネシア語における意見表明の談話分析 —ポライトネスの観点から—

INNA SYAHIDA INAYAH (東北大学大学院)

本稿は、日本語とインドネシア語における「意見表明」の言語行動をポライトネスの観点から談話分析することを目的とする。意見表明は日常的に用いられる発話である一方、異なる意見を持つ相手に対してはフェイス侵害行為 (Face Threatening Act, FTA) となる可能性があるため、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論を分析枠組みとして採用する。従来、発話行為の調査では筆記による談話完成テストが多く用いられてきたが、本稿では、より自然に近いデータを得るため、closed role-play (Kasper & Dahl 1991) を用い、「疎遠な上司」と「疎遠な同僚」に対する意見表明の場面を設定する。収集した発話は、発話分析で用いられる意味的単位である意味公式を用いて考察した。分析の結果、日本語話者は上司・同僚いずれに対しても {話題言及} を先行させ、意見表明によるフェイス侵害を和らげる傾向が確認された。さらに、上司には {譲歩} を用いて相手の都合への配慮を示し、同僚には {同意要求} を用いて共通基盤を確認するなど、関係性に応じた差異が確認された。一方、インドネシア語話者は上司に対して {発言許可要求} や {謝意} を前後に添え、ネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイスの双方に配慮する傾向を示した。ただし、同僚に対してはこれらの方略は用いられず、代わりに日本語には見られない {提案} や {依頼} といった FTA 負担の大きい発話を確認された。

モデルテキストによる授業外ライティング支援の有効性

孫芳 (東北大学)

ライティング指導において、リーディングとライティングを統合させた学習方法の有効性が先行研究で指摘されており、特にモデルテキストの活用が注目されている。本研究は、中国人日本語専攻学生を対象に、モデルテキストを活用した授業外ライティング支援がライティング能力の向上に与える影響を検証することを目的とする。

本研究では、中国の大学に在籍する日本語専攻三年生 66 名を視写群 (n=22)、作文群 (n=22)、統制群 (n=22) の 3 群に分け、各群に対して 7 週間にわたり異なる授業外課題を課した。全参加者に対して事前に SPOT90 を用いて日本語能力を測定した。また、事前・事後テストとして作文テストを実施し、収集した手書き作文をルーブリックに基づき、日本人教師と中国人教師の 2 名が採点を行った。

その結果、いずれの群においても事後得点が有意に向上し、授業外学習活動がライティング能力の向上に寄与したことが示された。一方、作文群における改善の幅が視写群より小さいことは、作文後にモデルテキストを提示する「暗示的・間接的なフィードバック」のみでは、十分な学習効果を引き出すことが難しい可能性を示唆している。視写活動は、モデルテキストの内容構成や形式を視覚的に捉え、手で書き写すことによって定着を促し、学習者にとって「足場 (scaffolding)」として機能する。また、統制群においても一定の改善が見られたことから、書く練習と自己修正の積み重ねが、ライティング能力の向上に寄与することが確認された。

街歩きを取り入れた大学英語教育の実践 —学生の動機付けに及ぼす効果に注目して—

阿部純（石巻専修大学）・増淵佑亮（常磐大学）

地域に根差した英語教育の実践や研究は以前より存在したが、近年では小学校や中学校に比べて数の少なかった大学での英語教育における実践報告も増加傾向にある。地域貢献を取り入れた大学英語科目の実施増加の背景には、文科省の方針や大学の理念・方針・イメージ戦略の側面のみならず、身近な事柄に関連付けた英語学習による学生のモチベーションの維持・向上への効果を期待する現場レベルでの側面もあるだろう。

先行研究では、各大学が所在する地域に根差した英語科目の実践が報告されてきた。それらは、地域連携・貢献を取り入れた講義における学習者の英語力、地域貢献、満足度に関する意識調査を実施し、いずれにおいてもプラスの効果が出たと報告している。しかし学習者の英語力に関しては、あくまでも意識調査に留まっており、講義実施の前・中・後の具体的な変化を見ているわけではない。さらに地域貢献をした実感や、それが英語学習への意欲向上に与えた影響も報告されているが、地域連携・貢献の何がどのように学習動機と結びついたのかは十分に検討されておらず、さらなる考察の余地が残されている。

本報告では、2025年度前期に石巻専修大学で行った授業実践における学生のモチベーション維持について報告する。毎回のリアクションペーパーと授業最終回で実施したアンケートの記述を分析し、学生のモチベーション維持における街歩きの役割について考察する。分析の結果、本実践において、街歩きは英語学習に興味を持たない学生にも、モチベーションを与えることに一定の役割を果たした可能性が高い。

自然主義の越境と変容 ——夏巧尊『長閑』と日本私小説の比較

范文瓊（東北大学国際文化研究科）

近代文学の発展において、自然主義文学は中日両国に大きな影響を与えた潮流の一つである。西欧の自然主義は日本に伝わり、「私小説」という独自の形態を生み出し、その成果は五四期の中国に紹介された。魯迅・郁達夫・郭沫若など留日経験者はこの文学潮流から刺激を受け、中国でも「自我小説」「身边小説」といった新形式が登場した。自然主義文学はまさに中国近代文学形成の重要な要素となった。

本研究は、このような背景のもと、魯迅と同時代に日本へ留学した夏巧尊に注目する。彼は教育・出版の分野で顕著な功績を残したほか、1920年代以降は自然主義文学の翻訳と紹介に力を注いだ。特に中国で最初の『国木田独歩集』を出版し、中国文学が自然主義の洗礼を受けるべきだと唱えた点は特筆に値する。

本稿が焦点とするのは、夏巧尊が自身を原型として執筆した三人称小説『長閑』である。作品は、中年教師が都市の職を辞し、家族とともに白馬湖畔に移り住む生活を描く。当初は文学的抱負を抱くが、やがて安逸な生活に情熱を削がれ、無為感と内心の苦悩に囚われていく姿が示される。その構想と表現には田山花袋の私小説との共鳴が見られる。すなわち、①主人公と作者の高度な同一化、②心情吐露による矛盾と自省の提示、③日常的断片を素材とし、自然主義的筆致で環境や生活を描写する点である。

以上の分析から、夏巧尊は自然主義文学の受容と普及に尽力しただけでなく、自身の創作を通して日本の「私小説」と響き合おうとした文学者であることが明らかになる。本稿の考察は、自然主義文学の国際的伝播と中日文学交流の新たな相互作用を理解する上で有益な視座を提供するであろう。



会場の様子 2025年9月13日斎藤隆枝先生撮影

閉会のあいさつ (16:30~16:35)

日本比較文化学会東北支部 支部長 高橋栄作 (高崎経済大学) 代読

〈懇親会〉

17:30 から楽蔵 - RAKUZO - 仙台青葉通り店にて懇親会を開催しました。懇親会は美味しい料理を頂きながら研究発表の質疑の続き、参加者の研究、勤務先の授業で工夫していることを紹介し合うなど、有意義なひとときとなりました。もちろん料理は完食しました。

事務局からのお知らせ

12月20日(土)、例会を開催する予定です。仙台に続き岐阜と関東から離れた地の開催が続きますが、皆様の参加をお待ちしております。

2025年度活動計画

2025年12月20日(土):支部例会

※12月13日を予定しておりましたが事情により20日に変更となりました。

会場:〒500-8288 岐阜県岐阜市中鶉一丁目38番地 岐阜聖徳学園大学岐阜キャンパス

3号館1階 312講義室 317講義室

[JR岐阜駅からのバスでのアクセス](https://www.shotoku.ac.jp/access/gifu-bus.html)(<https://www.shotoku.ac.jp/access/gifu-bus.html>)



2026年3月:支部例会・2025年度支部総会(東京未来大学・足立区)